

# 高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究

## —A 商業高校での支援活動の取り組みを通じて—

○酒井 朗 (お茶の水女子大学) ○千葉勝吾 (東京都立市ヶ谷商業高校)  
○濱野玲奈 (東京大学大学院) ○広崎純子 (国土舘大学：非常勤)

### 1 研究の目的

1990年代後半以降、高卒無業者の増加という問題を反映して、高校生の進路選択問題が再び注目を集めている。先行研究では、どのような高校生がどのようなプロセスで、無業者という進路を選択していくのか、また家計や社会階層要因は、彼らの進路選択にどのような影響を及ぼしているのかといったテーマについて、豊富なデータが収集され、分析がなされてきた。だが、そこから得られた知見からは、学校現場はこれからの進路指導をどう改善していけばいいのかといった具体的手だては必ずしも見えてこない。また、苅谷ほか(2003)が指摘するように、「従来の研究のなかでは、進路活動に乗ろうとしない高校生の意識がどのように構成されているのか、生徒たちの生活とどのように関係しあっているのかといった問題は十分解明されることはなかった」。

そこで我々は「現場に対してどういう還元をなそうるか」という臨床的な視点に立ち、首都圏にあるA商業高校において、先行研究の知見を踏まえた高校生の進路選択の支援活動を企画・実施した。この活動は同校の教師が設定した活動において、大学生や院生がボランティアとして生徒と関わりながら、おもに大学進学にむけて生徒の動機付けを高め、その実現を支援していくというもので、2002年9月から翌3月までの7ヶ月間実施された。本報告は、この支援活動の意義を検討することで、今日の高校生に対する進路支援のポイントについて理解するとともに、長期にわたる活動を通じて見えてきた高校生の進路選択過程の特徴を分析する。この作業のために、我々はボランティアと生徒の相互作用に関するフィールドノートを作成や、ボランティアが生徒と交わしたメールやボランティア間の活動報告メールの収集とともに、活動に参加した生徒に対する事前と事後のインタビューを実施した。

発表では、この活動に関わった5名の生徒の事例を詳細に紹介することを通じて、以下の3つの問いについて検討する。

(1) 進路指導のあり方を再考する上で、本プロジェクトの実践上の意義は何か。

我々は「希望・自己選択重視の進路指導」や「非進路強制の指導」という2つの理論により、自己

選択が至上価値を持つものとみなされているとする耳塚ら(2000)の指摘を踏まえ、そこからの脱却として、本プロジェクトを構想した。ただし、それは「社会からの役割期待」を提示して強い枠付けの指導を展開しようとする旧来型の指導の選択を意味したわけではない。進路指導を再考する上で我々が重視したのは、現実の生徒がおかれた時代的なコンテクストと教育的指導をどう折りあわせるかという課題である。すなわち、現代日本が、ギデンズ(1993)のいう「再帰的近代」にあり、何になりたいのか、どう生きたいのかを決める自由への人々の希求が日増しに強まっていることを前提とし、その下で学校がなしうることは何かを検討した。そしてその結果、本プロジェクトでは、大学進学という価値を提示しつつも、生徒自身のペースを大事にすることに重きを置き、できるだけ活動や関係への包絡による態度変容を目指すという支援の基本方針を設定した。以下では、こうした検討を経てなされた支援を通じて、今日の高校生にはどのような進路選択支援が求められているのかについて検討する。

(2) プロジェクトを通じて見えてきた、生徒の進路意識の特徴は何か。

進路選択とは、長期にわたってなされるものであるが、苅谷らの研究においても、生徒の進路選択を「過程」として理解するには至っていない。我々は、取り組みを通じて収集した豊富なデータに基づいてこの点を解明する。

(3) 生徒の進路選択には、いかなる要因がどのような形で影響しているのか。

先行研究では、親の経済状態や階層要因、あるいは青年文化の影響といったことが指摘されてきた。また、イギリスの未熟練労働者の子弟の進路選択を扱ったウィリス(1985)は、階級文化に裏打ちされた反抗的な生徒文化に着目している。これらの要因のそれぞれがどのように彼らの進路を規定しているのか、またこれら以外に重要だと考えられる要因はないかを検討する。

### 2 分析の視点

生徒の進路選択過程の解明と、そこへの実践的な介入の意義を検討する上で、分析にあたり以下の諸点に留意した。

第1は、社会構成主義的な進路指導を提唱する

L. Cochran(1997)が指摘するように、人々は行為や経験をストーリーとして構成しながら意味づけていくという点である。そこで我々は、生徒がボランティアの学生・院生との会話の中で、誰をどのように登場させ、どのような形で進路の語りを吐露するのかに着目した。

第2は、高校生とは人間形成の途上にある可塑的な存在であるという点である。高校生を対象としてアンケートを実施すると、必ずある意識傾向が出てくるが、それはその時点での、しかもある選択肢の中に押し込めた彼らの意識の断面である。だが、人間は常に他者と相互作用する中で自己を確認しつつ、他者に対して自己を提示する。生徒は相互作用過程を通じて、ボランティアや教師に対して進路の語りを紡ぐのであり、その語りはその生徒の置かれた状況や相手により変化することが十分予想される。また学校教育とは、この相互作用を教育的に編制し、より望ましい進路の語りを紡がせるように働きかける営為だと言える。

第3は、よりマクロな視点であり、生徒にある形で進路希望を語らせる社会的な権力作用への視点である。ドイツの社会学者ベック(1998)は、「個人化」という概念を用い、階級や地域社会や家父長的なジェンダー関係が提供していた伝統的なアイデンティティが崩れた現代社会においては、進路が個人の自由選択に委ねられるとともに、ある進路を選択した場合に伴う社会的な不平等や失業の危険などの問題も個人的問題として捉えられるようになったと指摘している。我々は、生徒とボランティアとのミクロな相互作用過程に注目する一方で、それをとりまく、このような時代的なコンテクストにも目を配るように留意した。

### 3 プロジェクトの概要

#### (1) A商業高校における進路状況と課題

A商業高校(以下A商)は首都圏都市部に所在する1学年4クラスの公立校で在籍生徒数は約400名で、男女比は2:8である。2003年3月卒業生は卒業時までの退学率が25%で、進路先は就職25%、進学35%、未定40%であった。

2000年にこのプロジェクトをはじめた時点におけるA商の状況は学校全体の雰囲気は「クーリングアウト」を促すような状態であった。このプロジェクトのコーディネーター役のB教諭は、「当時、本校には『うちの生徒には大学進学なんてありえない』という認識が教員間に共有されていた」と述べている。そして、生徒が進学相談にいても、「進学担当の先生から『挨拶からできないんだから大学なんてむりよ』といわれて生徒はやる気を失っていった。」といった対応が現実になされていた。その一方で書類審査で入学できる専門学

校については生徒に対して進学を薦めており学力試験や面接・作文は無理といった前提を共有していたのである。

このような状況を変えるには、学校のスケジュールで進路選択をおこなうのではなく、生徒自身のペースで進路選択をおこなうことが必要なのであった。教員の置かれている状況を考えると、そのためには外部の大学生がもつ若い感性とバイタリティーの支援が必要であった。

#### (2) プロジェクトのねらいと運営方法

本プロジェクトはB教諭が近くの大学の教員に依頼し、毎週2、3日放課後に大学生、大学院生に高校にきてもらい、進路選択の相談や学習支援、試験対策支援を希望する生徒に対しておこなってもらうということで開始された。

この活動は以下の項目をねらいとしている。

- i 大学生の実態を肌身で感じる。
- ii 進路にむけての時間を共有する。
- iii 自宅学習にチャレンジすることを支援する。
- iv 入試情報の検索と願書・提出資料の書き方や内容づくりを支援する。

#### (3) 参加生徒の状況

このプロジェクトの特徴と本研究における重要な関心は、生徒のプロジェクトへの参入過程とコミットのしかたにある。参加はオープンであり、授業、プリント、掲示を通じて誰でも大学生・大学院生に相談できることがアナウンスされていたが、実際には教員が個別相談をしてきた生徒に勧めて参加した生徒と、教員側から大学進学を進路先として提示された生徒が参加している。

本報告で報告するする5名のケースも教員にはじめは強く促されて参加し、その後も継続的に指導を受け進路を選択していった生徒である。それぞれのケースともその進路選択過程において家庭の状況や教師や友人からの様々な働きかけといった条件や状況を、大学生・大学院生と教員が連携しながら大学進学という価値を全面にしながら、生徒とともに考えたり示唆を与え、場合によっては直接的な支援をおこなうというものであった。

### 4 ケースの報告と分析

2003年3月に卒業した女子5名のケースについて、最大7ヶ月間の観察結果を報告する。

表1 ケースの概要

	氏名	欠席	成績	参加以前の志望
1	ヒロミ	数日	A段階	就職
2	リエ	10日	C段階	就職
3	チハル	80日	C段階	フリーター
4	アスカ	40日	C段階	就職
5	ミキ	40日	D段階	フリーター

なお、氏名はいずれも仮名であり、ケース4のアスカについては紙幅の都合上、当日配布資料に記載する。

### (ケース1) ヒロミ

祖父母と姉と弟の5人暮らし。母は離婚して一緒に住んでいない。父親は入院中。本人は「(B教諭に) 半ば無理やり(参加させられた)」といいながらも本活動に参加。評定値は4.4でクラス順位は1、2番である。家庭の経済状況が苦しく、高校の学費と家に入れる生活費を稼ぐために土日はバイトをしている。家族(祖母)は大学進学について一応賛意を表しているが、家計状況が大学進学を躊躇わせる最も大きな要因となっている。

ヒロミには、一方で大学受験を忌避する発話を繰り返しながら、他方、行動面では大学受験を目指して努力するという、大学進学に関する言動と行動の不一致がみられた。本活動への参加率は参加生徒のなかで最も高く、放課後用事がある一度帰宅した後にわざわざ学校へ戻ってきて本活動に参加したり、宿題にした文献はどんなに難しいと感じても必ず読んできたりと、行動面では積極的なコミットメントを示しながら、活動に参加しているのは「B(教諭の説得)に負けて」であって、「(自分としては本当は) 大学なんて行きたくない」のだと言いつづけている。

ここで注意が必要なのは、生徒本人が、常に大学進学への意思と日常的な経済的負担および進学に伴う経済的不安、そしてそれに関連した家族との葛藤のなかで揺れ続けているという事情である。学業でのパフォーマンスも高く、大学進学の希望がありながら(進路決定後の親インタビューにおいて、生徒が母親に話していたことが分かった)、家計の状況を考えたり、より直接的には姉から「(進学しないで) 働いたら」と言われたりするなかで、「本人の意思」自体が揺れ続けている。

10月以降は受験勉強のためにアルバイトを辞め、「親にバイトやめたこと言ってない、どうしよう」と言いながらも、進路決定時まで受験勉強に専念した。「(最初の受験校に) 落ちたら方向を変えて就職する」とも言っていたが、最終的には二度の不合格を乗り越えて東洋大の二部に進学が決定した。「大学なんて行きたくない」という発話を「生徒の意思」と捉え、「自己選択の尊重」「自己決定」の原則に則って「じゃあ、無理矢理進学を勧めるのもなんだから、もう来なくてもいいよ」と我々が言えば、進学へのコミットメントが継続したかどうかは疑問である。またボランティアとの良好な関係や進学意欲を高める働きかけが、本活動ひいては進学へのコミットメントを強化した

ことにも注意が必要であろう。進路指導において近年重視される傾向にある「生徒の意思・自己選択」が実際にはどのようなものなのか、再考の必要を感じさせられる事例である。

### (ケース2) リエ

両親と弟の4人家族。自営業でそれほど経済的な余裕があるわけではない。進学費用に関して母親は、多少の無理をすれば出せないこともないが、大学に行ってもどうしてもやりたい勉強があるのでなければ就職したほうが良いと言っている。評定値は3.0。「すごい遅刻が多いので、就職できないなって思ったんですよ、2年生の終わり頃。で、B(教諭)が「おまえも進学にするか?」と言ったから、あー、そうか、進学かって。」就職は無理だからという理由で進学を希望した。3年の5月から塾に通い始めたが、勉強の仕方が分からず、B教諭の勧めで本活動に参加。

活動開始時、進学という方向性は決まっていたものの、なかなか自分から動くことができず、志望校について「自分のことなんだから自分で探すなよ」というボランティアの言葉に対して「そう思うけど、何していいかわからないから何か指示して」と答えるような状態だった。活動の進行とともに、次第に志望校選択にも受験勉強にも積極的になっていき、大学へ行きたいという気持ちが「どんどん強くなっていった感じ」だったという。

しかし一方で学習習慣が身につけておらず、「ちょっと勉強に身が入らなくなってきちゃって、ずっと英語ばかりやって。受験勉強だから多いわけじゃないですか、やることが全然できなくて。」という状態になり、「お母さんが、そんな態度なら(塾を) やめれば」と言ったことで塾をやめたりもしている。家計への配慮も常にあり、「おねえちゃんが大学行くなら自分は行かない」という弟の言葉に考え込む様子もみられた。

11月、第一志望の駒澤大学を受験中に国土館大学の願書を出そうとしたが「駒沢がダメなら就職しなさい」と両親に言われ、受験料をもらえなかったために出願できなかった。その後、駒沢が不合格となり、本人は進学か就職かで深く悩む。その際、一昨年度に生徒として本活動に参加した先輩から「私みたいに二部にして、学費半分だし、昼間働けるから、親に負担かけないためにも…。本当に行きたいんだったら、ちょっと考えてみな」と言われ、それまで考えていなかった二部の受験を決心する。父親に「これを最後に受験させてください」と頼み込み、東洋二部に合格した。

リエは学業におけるパフォーマンスがそれほど高くなく、学習習慣も身につけていないことから、受験および学業そのものに対して自信をもてず、

不安をかかえている。また、「本当にやりたいことがなければ進学する価値がない」とする親に対して、具体的に「これがやりたい」と言えないことや、家計への配慮から就職も考えている。しかし、受験に向けて努力し、友達や先輩やボランティアと話すなかで、当初はただ漠然と考えていただけだった進学から、はっきりとした進学意欲が芽生えていった。進学の是非について悩み続けるなかで進路意識が形成されていったものと思われる。

### (ケース3) チハル

母、弟、妹、妹の子どもとの5人暮らし。父母はチハルが小学生の頃離婚。母は病気療養中で、妹の子どもが幼いため、長女として家族を支えてきた。成績はクラスで後ろから数番目、欠席や遅刻もクラス1多く、成績判定会議でいつも名前があがる生徒である。「高校さえ出てくれれば」という親の期待に応えようと必死に頑張っており、9月当初には、「(友だちとは) “どうする?” “フリーター” “どうする?” “フリーター” (と話している。)(自分は) 化粧のバイトがしたくて、美容部員がしたい。」と語っている。

だが一方で、「母親の面倒はずっと見ていきたい」、「母がまた悪くなった時に役に立ちたい」から心理カウンセラーになりたい、という希望を高2の頃から語っていた。その頃からB教諭に「看護婦からの道もあるから」と洗脳され、興味は感じていたが、金銭的な負担、学業面での努力不足、学校での達成度の低さ、といった諸々の要因から、「わたしには無理だから」とシカトしつづけ、高3の二学期に至る。本プロジェクトが始まってからも、看護学校への見学、中学校レベルからの数学の復習など課題を設定されれば、その場その場では積極的に取り組むものの、「(理科の授業の) カイコの解剖も途中で投げ出したのに、(看護の実習なんて) わたしには無理」「テスト勉強自体したことないから、どうやればいいんだろう?」と自信のなさや不安を口にし、何度も受験から後退する姿勢を見せる。その度にボランティアやB教諭がメールで頻繁に連絡を取り続けることにより、「自分に関わっている人が増えるとその人たちのこと考えようって思うじゃん。」と語っているように、継続的に努力する姿勢を見せはじめ、看護学校受験を真剣に考えるようになっていった。最終的には受験料の立替という直接的支援もあり3月に看護学校を受験し、不合格となったものの4月からは某大学病院で看護助手として勤務しており、来春また看護学校を受験する予定である。

チハルのように学業成績をはじめとした様々なパフォーマンスが低位にある生徒は、学校からは進路指導の対象外とみなされる。しかし、本プロ

ジェクトにおいて、生徒のペースを大事にしながらも一貫した方向性を提示して受験への支援を続けたことで、自信のなさから生じる不安をいくぶんか和らげ、より安定した進路選択へと導くことが可能となった。生徒のゆらぎを見守りつつも、後退する方向へ揺れた時にこそ支えが必要であることを示唆する事例であるといえよう。

### (ケース5) ミキ

義母、実兄、兄の妻、義妹との5人暮らし。実父は義母と離婚し別居中、実母と実父も離婚しており離れて暮らしている。欠席、遅刻ともに多く、成績も下位であるが、A商で行われているボランティア活動には積極的に参加するなど、学校に対して強い反抗心を有しているわけではない。本プロジェクトへの参加は「B教諭に言われて」決める。親や兄も「遊ぶよりはいいんじゃない?」と進学を後押しし、願書作成の支援もしてくれている。

9月当初には、「大学進学。史学専攻。日本史と世界史は得意。(テストも) 90点くらい。」と語っており、受験校を決定する際にも積極的に情報収集し、志望校として立正大史学科や東洋大史学科を主体的に選択していく。「(大学に入ってから) 発掘、修正、古文書解読などの実習が楽しみ。南米は、メキシコあたりに行って土地を買って発掘したい」と熱心に語る。だが、同い年の義妹との微妙な関係もあり、「家を出たいから二部にしたい」と言いだし、願書の作成なども滞ったまま志望校の出願期日が過ぎてしまう。10月中旬までは、頻繁に参加し、歴史や英語の勉強にも取り組んでいたが、11月に入るとパツパツ顔を出さなくなり、たまに顔を出してもおしゃべりだけして「バイトがあるから」と帰っていく。

我々は事後報告を受けたのだが、9月頃からドイツニーランドでのバイトに応募しており、採用され、11月初旬よりバイトを始めていた。ボランティアに「私、人から自分の将来を干渉されたくないんだ。別に大学出たからって何がすごい! って感じかな? あたしの人生は一度きりだから好きに生きさせて欲しい」というメールを送ったり、「カレシのKさんに「大学は楽しいんだよ」と言われても」「Kさんが大学入ってやってきたことは、みーんな高校の時、やったし、新しいことないし」、「大学で遊んでるよりも働いてた方がいいかなあ」と語ったりする。結局は、志望していた大学にはどこも出願せず、ドイツニーランドでのバイトというフリーターの道を選択した。

ミキの場合、大学に関する態度(語り)が、「大好きな歴史を学べるのが楽しみ」というものから、「遊ぶところだから行かなくてもいい」というも

のへ変化している点に注目せねばならないだろう。生徒は、その時点その時点での自己の選択を正当化するように語りを紡いでおり、「自己選択」に委ねるといことは、生徒の自己正当化の方便に与することを意味する。結果的に、我々が提示した大学進学という価値は選択されなかったのであるが、生徒の選択自体が可変性のあるものであり、ある時点での「希望、自己選択重視」という現行の進路指導の抱える問題を浮かび上がらせる事例であるといえる。

## 5 進路指導としての評価と可能性

### (1) 進路指導の直接援助としての評価

職業高校であるA商の進学指導は就職指導が優先され、例えば就職者座談会は開催されるが進学者座談会は開催されていないので、生徒は高校では進学した学生たちの生の声を聞くことはできない。また、AO入試や自己推薦入試など生徒自身が自分をアピールしていく入試についてもノウハウがない上に対応をするゆとりが教員にはない状況であったとB教諭は述べている。

これに対して毎週定期的に放課後、大学生・大学院生が学校に来てくれて、相談に来た生徒に対応してくれるということは進路指導上極めて効果的な活動であったといえる。つまり、教師がおこなう指導は進路を考え相談する意志や気持ちがある程度固まってはじめて始まるのであるが、このプロジェクトでは、「どうしようか?」という段階で教員から「大学生さんが毎週来てるから相談してみよう」という「どうしようか?」を考えるプロセスを支援するものなのである。

生徒は「先生には大学進学を勧められたんだけど・・・」決めかねている理由を大学生・大学院生に語る。その内容は家庭の経済的なことであったり自分の成績の悪さであったり、大学なんかいっても意味ないといった風評に対する不安であったりするのであるが、大学生・大学院生はそれを真剣に受けとめて考えてくれる。自分の進路選択をいっしょに考えてくれる人がいると生徒は感じることができ、様々な気持ちを語っている。

### (2) 学習支援としての効果

B教諭によれば、A商の生徒には中学校までの段階のどこかで、何らかの挫折経験や家族や友人関係の悩み、または遊び仲間との交流などから、学習が手につかなかつたり欠席しがちになったりして低学力に陥っている者も少なくない。したがって学習習慣がまったくなく、「勉強する暇があったら、雑誌でも読んでいたほうがまし」などという価値観を所有している。

ところが、本プロジェクトでは宿題の作文はまったくやっこないものの大学生・大学院生が横

にいて書かせたり学習をさせたりすると、数時間集中して取り組むことができることが確認されている。「うちの生徒は15分集中するのが限界」と思われている生徒たちが自分に寄り添ってくれる人がいることによって力を発揮できたと見ることができる。やらされてるではなく頑張ることを身近で期待され、見張られるのではなく見守られて、それに応える努力をする姿がそこにはあるのである。

### (3) 自己の進路展望をもつ

このプロジェクトで教員や大学生・大学院生から生徒に与えられる「大学がいいんじゃないか!」という示唆は、「どうしようか?」という漠然としていて何を考えたらよいかわからない混沌とした状況から、大学は自分にとって必要かどうかの判断を迫られることになる。同時に学科調べや小論文対策も進んでいく、この過程で大学進学という方向性を内面化していくケースと大学進学ではなく、専門学校や就職・フリーターといった進路へということを対比させながら考えるケースがある。

さらに大学進学以外の進路選択をする場合には、大学進学を勧める教員や大学生・大学院生を納得させるだけの理由が求められるのである。

### (4) ゆらぎに注目した指導

本プロジェクトにおこなうにあたって学校は、生徒の個人情報について、大学生・大学院生に対して生徒本人が話すこと以外に学校からは提供しないこととしていた。

しかし、実際には本プロジェクト通じて生徒の情報が継続的に収集された。教員が3年間で数回の進路希望調査と多い生徒で10数回、少ない生徒で数回の面接で把握する情報よりも、毎週接する大学生・大学院生の方が進路選択にゆらぐ生の声をリアルタイムで把握していた。

学校はどう決めたかの結論を知って個別の進路指導が始まるシステムであり、その段階まではシステム的には担任の個別指導がおこなわれるのであるが、計画的な指導が早期化されるほど担任はそちらに時間を割かれ十分な指導がおこなわれなくなる危惧がある。

このような状況に対して大学生・大学院生から学校側にフィードバックされる情報は大変重要である。本プロジェクトでは定期的に教師と情報交換がなされ、生徒の発話の真意や問題の解決に向けての方法が検討された。これにより生徒の「ゆらぎ」を学校が把握しながら効果的に進路の自己決定へと指導をおこなうことが可能となった。

## 6 高校生の進路選択の特徴とその社会的背景

### (1) 「あきらめ」か「ゆらぎ」か

A商での生徒への進路選択支援を通じて見えて

きたのは、このプロジェクトに参加した生徒の多くは、当初は自己の成績の低さや家計の状況から大学進学をあきらめていることである。アンケート調査であれば、こうした生徒は無業者志望としてカウントされるに違いない。だが、前節で指摘したように、プロジェクトを通じて大学に行くことが示唆されることで、生徒は大学に進もうか止めようかと「ゆらぎ」を見せ始める。B教諭やボランティアの関わりは、彼女たちにゆさぶりをかけるよう作用した。本プロジェクトに参加したような生徒の場合、進路意識とは「あきらめ」か、こうした「ゆらぎ」として存在するものと捉えるべきなのであり、進路選択とは、そうした彼らのある時点での中間的な意志決定の産物であると考えた方がいい。生徒が下した結論は、大学進学へと向かう場合もあるし、ミキのようにそれに対抗して別の進路を選択する場合もある。

だが、ここで共通しているのは、そこでは、可塑的な存在としての生徒という側面がクローズアップされることである。進学校の生徒の場合は、大学進学は当然のこととして捉えられているために、この可塑性ということが看過されがちであるが、A商の生徒の場合にはそれを考慮することが重要であり、それゆえに本プロジェクトのような支援活動の「教育的」な意義が認められるのである。

## (2) 進路選択を規定する要因

生徒たちの進路選択を規定する直接の要因は、しばしば本人自身の成績の低さであったり、学習習慣が身につけていないことであったりする。また、それが基となって本人たちは自信を持たず、大学進学に対して不安を募らせることとなる。

また、そうした個人的要因とは別に、本プロジェクトを通じてきわめて鮮明に浮かび上がったのは、家族との関係や家計の状況である。しばしば、親やきょうだいとの関わりが、生徒たちの進路の語り登場する。

家計の問題も、単純に「お金がないから大学をあきらめる」といった言い方ではなく、親に迷惑をかけたくない、親の借金を返したいといった家族への気遣いという語りの中で登場する。しかもその場合は、往々にして、生徒は自発的な意志として大学に行かないことを語るなのである。

このように家族のことは、彼らの進路の語りしばしば登場するのであるが、それは単純に家族という変数が彼らの進路を規定していると捉えるよりも、自らの進路の問題を家族の問題として語らせる、あるいは家族の問題としてしか語らせない権力作用が働いているものと理解すべきだろう。

たとえば、彼らが親に迷惑をかけたくないとし

て家計の状況を進路選択の語りを持ち出すのは、実は、国家のサポートがきわめて弱いという日本の政治状況に規定されていることでもある。ジル・ジョーンズらの『若者はなぜ大人になれないのか』(1996)を訳した宮本が、同書の解説の中で、イギリスと対比しながら指摘しているように、「わが国の場合若者の自立を達成するための援助はもっぱら親に負わされており、国家の果たす役割は欧米先進諸国のレベルからみると著しく低い」のである。

生徒は進路選択を家族との関わりの中で語ったり、あるいは自己の成績の悪さなどの問題として語ったりする。いわば「個人的な失敗」や「身内の問題」としてのみ語るものであり、大学に行くための奨学金制度の不整備の問題を批判することもない。

なお、彼らの家族の語りには、その家族が帰属するとされる階級の文化的要素が語られることも少ない。もちろん、大学に行くことを親が進めないという意味ではその種の文化的要素が見られるということもできる。だが、ウィリスが描いた「野郎ども」のような、労働者階級としての「われわれ意識」に裏打ちされた中産階級への対抗的な語りは、本プロジェクトのいずれのケースからも聞かれなかったのである。ここにはまさに、ベックが述べたような、社会的不平等や社会的危険の個人化を反映した状況が生じていると言える。

プロジェクトを通じて、もう1つ浮かび上がったのは、大学などの進路に関して生徒が有している情報量の少なさという問題である。情報に関しては、下村(2002)が苅谷(1991)をもとに、「高校生は自分がどういう進路に進むことができるかを自分の成績や欠席日数などからかなり正確に予測できる」と述べている。だが、それらの情報はあっても、例えば大学進学に関して彼らがある情報は極めて限られている。親が大卒でない場合、生徒たちは「大学＝レジャーランド」というマスコミが提供してきたイメージだけを有している。

本プロジェクトでは、大学とはどういうところか、どのような学科があり何が学べるのか、入試にはどんな種類があり、どのような準備が必要かといった情報を生徒と一緒に収集する作業にかなりの時間を費やした。情報を得ることで、生徒は新たな進路希望を見だし、それにむけて動機づけられていくケースも見られた。

(文責:1,2,6 酒井/3,5 千葉/4(ケース 1,2 濱野),(ケース 3,5 広崎)